
ホラー短編シリーズ(脳関連を除く)

脳好き人間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホラー短編シリーズ（脳関連を除く）

【Nコード】

N0926Z

【作者名】

脳好き人間

【あらすじ】

ホラーの短編集です。

僕はどうしても、ホラーを書くと思ってしまうので、意地でも脳に無関係なのを書いてやる。と思った次第です。

墓

墓、墓って、怖いよね。だってさ、人の骨がたくさん収納されてるんだよ。

最近、若い女の人がさ、いっつも墓参りに来てるんだよね。それも夜遅く。

それでさ、面白いことに、墓に話しかけてんだよ。あははははは。超おもしれー。

墓に話しかけるって、マジで頭おかしいんじゃないのか。だって、物だぜ物。

物に話しかけるとか、マジで笑える。つーかさ、その話しかける内容も、めっちゃおもしれーんだぜ。

「私を一人にしないで」とか、「どうして死んじゃったの?」とかさ、いやいや、一人が嫌ならお前も死ねよ。

後追い自殺する勇気もなく、恋人のことを忘れる勇気もないからって、無駄に墓参りなんかに来やがって。

ぷっ、まあ、「どうして死んじゃったの?」って質問には、俺でも答えられるけどな。

だってさ、そいつ殺したの、俺だもん。ぷっ、はははははは。やつべー、超楽しーよ。くっ、マジ、笑いを堪えるの、きつつ。

いやー、それにしても、墓っていいよな。指名手配されてても、安心して暮らせるし。警察だって、わざわざ墓の中身まで探さねーもん。

それにさ、あのバカ女のおかげで、飯にもタバコにも困らねー。ま、まさか自分の供え物が、恋人を殺した犯人の晩飯になってると思うわねーだろうな。はは、あはははは。

「……それじゃあ、また明日」

バカ女が帰って行く。よし、お食事タイムだ。

今日は、すげえ豪華だな。まさか、毎日供え物が無くなってるのを見て、死んだあいつが食べてるとか、そんなことを思ってるのか？ つくづくバカな女だな。では、いっただっきまーす。って、あれ？ か、体が動かねーぞ。痛い痛いっ！なんだ、腕が、足が痛い！
おいおい、どうして死んだあいつがいるんだ？

離せ、離せよっ！

ギー、ギー、近くで音がする。体が動かねーから顔だけ後ろを向くと、墓が、倒れてきた。

痛い、痛い。ヤバイ、どうにか上半身は無事だったが、両足が墓の下敷きだ。

「……よくも、許さん」

あいつが、俺の腕を掴む。グギリ、いとも簡単に、俺の腕は折れた。

さらに、折れた腕を擦られる。ギギ、ギギ、グチャッ。

「うわあああ！腕が、もげた！おいつ、腕返せよっ！」

次は、反対の腕だ。グギリ、きちんと手順を踏む。

「やめろおお！やめてくれええ！」

あいつが、俺に許しを乞う。ギギ、ギギ、ブチッ。
ふう、これで両手とも、もげたな。

「やめてくれっ！謝るっ！謝るからっ！」

次は、首だ。だが、その前に。

「うつ、うわああ！目っ！」

目に、石、砂を擦込む。鼻、口、耳にも、満遍なく。
そして、最後に首。

「やめてくれっ！死にたくない、死にたくない！！！」

ギギ、ギギ、ギギ、ギギ。中々もげない。ギギ、ギギ、ブチッ。

「……俺も、死にたくなかったよ」

心無し ウナギ（前書き）

心ない男のウナギの話。

心無し ウナギ

今日も俺は、夜の街を歩く。それも表通りではなく、裏通りを。最近になって知ったことなんだが、裏通りには、かなりの不法入国者達が生きている。

そいつらの多くが、生きるために犯罪を犯したり、警察に捕まっ
てしまったりしている。

可哀相だよな。ただ、生まれた環境が悪かったただけで、俺達だっ
て同じ環境に生まれてたら同じようなことをしてただろうに。

おっと、子供が一人、いや二人。姉妹か。

「おい、お前ら、その生活から抜け出したいとは思わないか？」

俺が話しかけると、二人は顔を見合わせた。まあ、言葉が通じな
いんだから、疑問に思うよな。
だが。

「俺が、助けになってやる。ついて来い」

修羅場をくぐって生きてきた奴ってのは、信用できる人間を直感
で見分けることが出来る。

俺は、心の底からこいつらをなんとかしてやりたいって思ってい
る。それが伝わるはずだ。

今までも、そうだった。

案の定、俺が歩きはじめると、こいつらはついて来てくれた。

あとは、同士達の場所へ行くだけ。それから、こいつら次第だ。
まあ、強く生きてくれよ。

傑作だよなあ。あの二人のおかげで、今日も美味しい酒が飲める。
しかしまあ、毎度毎度簡単に騙されてくれるよな。

俺みたいな優しいおじさんについて来ちゃって。それまで培ってきた経験はなんなんだよ。馬鹿だなあ。

不法入国者に、ホームレス。いなくなっただって誰も気づけない。
現に、俺はまだ捕まっていない。

内臓抜くか、風俗行きか。内臓の入れ物は、ウナギの餌にすればいい。

ああ、今日は内臓抜きコースじゃなかったから、ウナギちゃん達に餌をあげられなかったな。

俺は優しいおじさんだからな。常にウナギちゃんの為だけに生きている。

あいつらが俺の本性を見抜けなかったのは、多分。
俺が、心なしか心無しだったからだろうな。

こたつ

今年も冬がやってきた。朝、起きるたびに寒くてつらい、布団から出たくない、という弱音と戦わなくてはならない。憂鬱だ。

しかもこの前、その誘惑に負けて二度寝して、会社に遅刻したんだっただな。

あの時の上司の怒り方、常軌を逸していたよな。あれこそストレス社会が生んだ廃棄物、つと、流石にそれは言い過ぎか。

とにかく、会社に行く準備をしないと。もう怒られるのはうんざりだ。

時間は……、あと十分くらいなら余裕があるな。まずは五分くらいこたつで暖まってから準備するでしょう。

ああ、こたつは最高だ。体が芯から暖まっていく。

しかし、そろそろ時間だ。朝飯を食わないと。くそっ、こたつから出ないといけないのか。

……いや、待て。冷蔵庫がこたつの近くにあれば、わざわざこたつから出ずに済む。今日、一回だけ苦勞することで、明日から毎日樂をすることが出来るんだ。

冷蔵庫をこたつの近くに移動させた。これで、朝飯のたびにこたつから出なくても済むぜ。

手をのばし、冷蔵庫からパンを取り出し、食う。

パンを食べ終え、時計を見ると、会社に行かないといけない時間はとくに過ぎていた。多分、冷蔵庫を運ぶのに時間がかかったせいだろう。

だが、今の俺にはそんなことどうでも良かった。

何故なら、気づいてしまったからだ。会社に行く必要など無いということに。

俺が考えるに、人間ってのは幸せになるために生きているんだ。

そして今、俺は幸せだ。仕事を成功させた時よりも。

昼前、会社から電話がかかる。うるさいな、俺の幸せを邪魔するなよ。

というか、よく考えると携帯、いらないよな。会社にも行かないし、誰かに連絡することもない。

無価値な存在め、折角だからこたつのエサにしてやろう。

ジュー、とこたつの熱を出す部分に押し付ける。すると、忌ま忌ましい着信音が途絶えた。こたつさまさまだぜ。

あれから三日が経った。冷蔵庫の中身もそろそろ尽きるし、どうしたものか？

五日が経った。昨日から何も食べていない。腹が減った。でもい

いんだ、俺は今、幸せだし。

七日が経った。空腹だ。しかも暑いな。なんだ、この熱する部分。つかこの台なんなんだ。何故俺はこんな場所にいる？

くそっ！むかつくだよ！ぶっ壊してやる！この台も、その白い箱も、映像を流す箱も！全て、全て破壊してやるよ！許せねえ！俺を馬鹿にしやがって！

ああ、ごめんなこたつ。お前は俺をあんなに幸せにしてくれたというのに、お前にこんな酷いことをしてしまつて。許してくれ。俺も、すぐに逝くから。

埋葬屋

やっぱり冬は最高だ。お客が一年間で最も多いし、アレの状態も良い。夏だったら、時間が経つと腐る場合もあるんだが、冬ならほとんど大丈夫。ゆったりと仕事ができる。

埋葬イズマイソウル。ああ、今日も早く死人がでないかな。

そんなことを考えていると、携帯がうごめき始めた。うごめくというか、振動。バイブレーション。

電話の相手は、看護婦、師の怜香さんだった。どうやら、仕事の依頼らしい。

ちなみに、法律により、女性も男性も看護師って呼ばなきゃいけないんだよ。覚えておこう。

病院の死体安置室、いつ見ても素敵だな。しかも、今回の死体は二人、さらに片方は美しい女性だ。ひゃっほう！

一人はホームレスのおじさん。不良少年達に殺されたらしい。身寄りがないから俺に仕事が出来たわけだ。

そしてもう一人、女性の方は、白衣の天使、怜香さんに殺されたらしい。痴情のもつれてやつ？

警察に見つかるやバイから、俺の仕事。

ロックな俺のギターケースに死体を入れ、家まで持ち運ぶ。警察に見られたらアウトだな。いや、デスメタルですって言ったら許してもらえるかな？

デスメタルだぜ、イヤッファー！

幸い、警察に止められることもなく、無事に家まで着いた。

俺の知り合いで、死体ちゃん達をウナギのエサにする最低な奴が

いるんだけど、そいつは警察に捕まったからな。家に帰るのもスリル満天だぜ。

いやあ、日本の警察って、優秀だからな。前住んでた国だったら、死体と手を繋いで歩いてても金さえ払えば許してくれてたというのに。

ノコギリと針と糸、準備オツケー。昨日から冷凍保存してある死体一つに、今日の二つ、準備オツケー。

では、手術を開始します。

まずは全員の手足、頭を切断します。そして針と糸で縫い付ける。はい終わりー！手術完了！

頭が四つ、手が六つ、足が六つの化け物の完成だ。

やっぱ冬はいいよな。夏だったら、手術が終わる前に腐っちゃうし。

よし、じゃあ台の上に置いて、おニユーのデジカメのタイマーセット。はい、チーズ。

写真も撮ったことだし、そろそろこの化け物を埋葬するか。

化け物を台車に乗らせてー、るんるんるん。庭まではっこんできましたよー。

そしたら穴におっとし、ましょ。

ドンッ！

しったいを確認しましーたらー。あーなを埋めて、あげまーしよう。

こーれっでお仕事かんりょーですつと。

ふう、腕が六つもあると、穴を埋めるのも簡単だな。
でもさ。

なんで俺は俺を埋めたんだ？

埋葬屋（後書き）

自分は、自分ですか？

間違えて自分を埋葬しないよう、気をつけましょう。

紫の鏡

紫の鏡って知ってるか？

この言葉を二十歳まで覚えてると、死ぬらしい。笑えるよな。

そんなことあるはずがないって。幽霊なんて非科学的な存在、あるわけないし。

それでも幽霊なんて存在を信じているバカがいるんだから、どうしようもないよな。

仕方がないから俺が証明してやるのさ。二十歳になる時、俺が死ぬかどうか。幸いあと二時間で二十歳になる。

加藤 勝、二十歳の誕生日になるわけさ。

紫の鏡、紫の鏡って。はあ、あと二時間もあるのか。

待つのも面倒だし、殺すなら早く殺してくれよ。二十歳になってからなんてルール、守らなくていいからさ。

待たなくて、いいの？

待たなくていいって。ぶっ、実際に殺されることなんてないだろうけど。

そういえば、今までどうしてこんなルールを守ってたんだろ？

そんなこと知るかよ。本人にでも聞いっ。

このルールを破ってもいいなら、二時間後に殺す残りの九人。今からでも殺しに行くかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0926z/>

ホラー短編シリーズ(脳関連を除く)

2011年12月31日18時53分発行